1971　昭和４６年３月１日発行　鶴研
雑誌　歴史読本　３月号　２頁
新人物往来社
見出し［仁義］　撮影［鶴田浩二］　P1

ずいひつ

仁義

鶴田浩二（映画俳優）

仁義をきるとか、仁義を尽すとか、あいつは「仁義」が良いとか悪いとか、日常、よく使われる言葉である。

平板な解釈をすれば、「仁義の世界」「仁義一途」「仁義即仁侠」ＥＴＣ……こうなると極めてヤクザ的なニュアンスが濃厚であり、むしろヤクザの有様を説明する為に存在する言葉であるような錯覚さえ持たせるものである。

しかし、「仁」とは「義」とは、果してどのようなエッセンスを持ったものであるか、余りにも日本語が雑に使われすぎる現今、改めて振り返ってみる必要が有るのではなかろうか。「仁」とは、もともと儒教的なヴァーチュな意味を持つもので、博愛を内容とする主徳、もっとシンプルな言い方をすれば「なさけ」でありヒューマニティなのである。「義」とは、文字通り正しい途（道）であり、行為の正道に依ることである。

両者とも、「五常」の一つであることは周知のところで、人間として常に履（ふ）み行なうべき道徳であろう。『太平記』にも「古、五帝三皇の、天下に王たりしより以来、儒教を以って仁義を治め、道徳と以って淳朴に侵し給う」とある。

昨今、礼、信、節と謂う人間生活を根本的に支えているであろう諸条件がとみにうすれ、「断絶の世代」と呼ばれる流行語が横行している。私には、この「断絶の人間関係」という言葉ほど難解極まるものはない。何故なれば、吾々が生存し得る社会の構成は「人間関係」の礼と躾によってその主幹の役目をなしているからである。

「礼」にしても「節（せつ）」「躾（しつけ）」にしても、大なり小なり形式主義であることは間違いない。或る種の人は形式や型を封建的なもののように見なして嫌うようだが、実際は形式や型がはっきり打ち出されるからこそ社会は円滑に運転しているのである。

戦後の日本は、戦国乱世の不安定な社会から、平和の恢復による安定した社会へと急速に移り変った。このアメリカンナイズされたコスモポリタンな世情の中で、その生活を基盤とする「しつけ」が段々薄れて行ったのはどうした訳であろうか。それは一見平和そうにみえてはいるが、実は極めて不安定な社会であるからなのだ。不安定な社会なればこそ尚更に「しつけ」の問題が云々される。既成の生活習慣（日本人の）が崩れ、社会に於ける凡（あら）ゆる欲望や感情の在り方が見失われ、しかもそれらに代るべき新しいものを熱望する声の起るとき、「礼」「躾」の必要性がさかんになる。

今の日本にみられる過渡期特有の恐慌時代には、新しい時代の事態に対処するため、社会対個人の調整に役立つ新しいモラルが必要で、現在の無制限な個人主義に修正を加え、子供達の教育訓練の問題を含めて、社会の存続のためには「共通の福祉」に向って進んで協力、尽力する日本人の徹底的な権威主義によって貫かれる「しつけ」が大問題なのではないだろうか。むしろこの混乱した世相を再構成し秩序づけるためにはそれしか無いとも

言えよう。しかも、それは社会的強制力に支えられたきびしい「しつけ」でなくてはならない。「礼」「躾」とも、そう言う意味では礼儀作法であり、実際の生活（社会生活）、殊（こと）に家庭生活の潤滑油の代名詞なのである。

いまどきの若いものは……と極めつける声をよく聞くのだが、果してそれを言っている大人達が、円熟、重厚と称するいわゆる現実的思惟が、本質的に言って、どれ程立派なものであるか、甚だ疑問であり、長い人生航路の汚穢にまみれ、その放埒の愚かさ空しさをカバーしている自己弁護なのかも知れない。たしかに現代の青年の思惟、行動は未熟であり、空想的である。しかも未熟であると言うことは、自己の発展を自からの手で成し得る可能性を充分に秘めている青年の特権ではないのだろうか。少くとも明日のための世俗的打算のために、空しい妥協に終ってはもらいたくないと希（ねが）っている。それは余りにも痛々しいからだ。

いろいろと理屈を並べてはみたが、要は人間の生きて行く必須条件であるべき「仁、義、礼、智、信」の現在の在り方を、各人各様の立場で老若を問わず振り返ってみつめ直す必要があるのではないだろうか。私もその例に洩れない一人である。

私は「らしく」と言う言葉が大変好きだ。であるから私は映画俳優らしく「仁義」を欠くことなく、懸命に「仁義」を尽し合いたいと願っている訳である。

今日も、昨日も、明日も。亦その次の日も。